

向島藤の木小学校 教育目標・教育方針

教育目標

- ① 課題意識を持ち、仲間とともに協働し、解決する姿
- ② 時と場に応じて正しく考え、判断し、行動する姿
- ③ 多様な価値観を認め、互いに尊重し合い、共に高め合う姿

目指す子ども像

[1・2年（ユニット）]

- ① やってみたいと思う気持ち、やればできるという自信があふれる子ども
- ② 正しいことを「正しい」と考え、行動できる子ども
- ③ 自他を大切に、なかよく、楽しく遊ぶ子ども

[3・4年（ユニット）]

- ① やりたいことを計画、提案し、実現に向けて、協働しながら実践する子ども
- ② 異学年を思いやり、優しく関わる子ども
- ③ 粘り強く、やり遂げる子ども

[5・6年（ユニット）]

- ① みんなが楽しい学校を主体的に創り、取り組む姿の実現
- ② 下級生を思いやれる姿の実現
- ③ 気概をもって挑戦、個で学び協働して創り上げることに喜び
をもつ姿の実現

育成を目指す資質・能力

- 課題設定力（見つめる）
- アセスメント力（見通す・たてる）
- 情報選択力（さぐる 個別）
- 相互調整力（深める 協働）
- 自己活用力（広める）

目指す学校像

- 新しい学校の形を模索し、主体的に未来の学校の在り方に挑戦する学校
- 社会貢献できる有為な人材を輩出できる学校

(1) 「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標

子どもたちを中心に据え、子どもたちが自身の興味関心を高め、主体的に学習を進めることができる学校システム及び授業・学習環境を構築し、子どもたちの資質能力を育む。

具体的な取組

<学校システム>

・ 2学年によるたてわり学級の構築

低学年ユニット（1・2年）・中学年ユニット（3・4年）・高学年ユニット（5・6年）及び育成ユニットの4つのユニットにわけ、育成ユニット以外はそれぞれ2クラス形成し、異学年と一緒に学習することができる環境を作る。

2学年が一緒にになり、学習や遊び等、様々な学習活動に取り組む中で、上の学年の児童には上級生としての自覚が芽生え、リーダーシップをとる場面が多くなるだろう。これらは、学習にもつながり、学習に対する主体性を発揮する場面が生まれやすくなると考える。

学習面においても、授業中の話し合いや協働の場面においても、自身の考えを下の学年の児童がわかるように咀嚼して話す必要があるため、自身の考え方の理解を深める必然性が生まれてくる。

下の学年の児童にとっては、同学年だけでは経験することがない上級生の姿を見ることができ、身近に自身が目指すべき姿を感じることができる。学習面においても、上級生のアイデア等を取り入れることができ、学習の幅を広げることができる。

・たてわり時間の常設

朝 8：30～8：55までの時間を「たてわり」の時間と設定し、たてわり学級で活動する時間とする。

たてわりの時間では「個の自己追究」の時間と「共働」の時間を中心に、フレキシブルに設定する。

「個の自己追究」では、自分自身の興味があることや課題と向き合い、それら追究する時間とする。

（例）「自分は読書が好きで、今は○○シリーズにはまっているので、そのシリーズの続きを読む。」

（例）「算数のかけ算が苦手なので割り算に時間がかかるので、ミライシードで勉強しよう。」

など。

これらの活動が進む中で、自身に対するメタ認知が進むとともに、学力だけでなく、自身や学級・学校等の課題について考える課題設定力・身近にあふれる様々な情報の中から、自身に必要な情報を取捨選択する情報選択力・それらの課題を解決するための方法を考え、解決までの見通しを持つアセスメント力・課題解決をした経験を他の課題について応用する自己活用力などの資質能力が育まれると考える。

「協働」の時間では、自身や周りの環境から課題を見つけ、友だちと協力して解決する方法を考える活動を行う。

（例）新しい学級の仲間と仲良くなるために、ドッヂボール大会を企画立案し、ドッヂボールを楽しむ。

（例）教室の周りにゴミが落ちているので、きれいにする方法を話し合い、みんなで掃除をする。

（例）図書委員会の高学年児童が、読み聞かせを行う。

（例）運動会が近いので、リレーメンバーで集まって、バトンパス練習をする。 など。

それら中で、課題を見つける力（課題設定力）や、解決までの道筋を見立てる力（アセスメント力）、自分や友だちの意見を調整する力（相互調整力）等を育むことができると考える。

*1 学期・・ユニット・学年で集団として仲良くなる期間

*2 学期以降、児童会を中心に、子ども自身が企画・実施を行えるように予定

- ・朝会の定期開催（月1回）→児童集会へ

朝会では、「校長先生のお話」や表彰等、必要なことは残す。これらは、児童の日々の取り組みを教職員が肯定的に評価し、児童のセルフエスティームを高めるため、活用する。また、司会進行も含め、児童が委員会やたてわり活動の場としても活用できるようにする。

子どもたちが全校児童の前に立ち、自分たちの思いや考えを話す機会を作ることで、子どもたちの主体性が向上するとともに、児童の経験を高めるのにも役立つと考える。

<授業>

- ・様々な授業形態の確立

S（セパレート）型（学年ごと）・T（トゥギャザー）型（たてわり学級ごと）・M（ミックス）型（ユニット合同）・O（アザー）型（ユニット外合同）の4つの授業形態で、教育効果を考えながら実施する。

（例）国語科「本の紹介」の単元では、導入はM（ミックス）型（ユニット合同）で授業を進め、S（セパレート）（学年ごと）でそれぞれの紹介する本の紹介文を書き、アザー型で交流を行い、それぞれのおすすめ本紹介をする。導入でパフォーマンス課題はユニット共通にしつつ、それぞれの学年の学習内容に沿った学習を進め、交流の際には、異学年と交流することで、読書の幅を広げたり、紹介の仕方を知ったりすることができるようになる。

（例）体育科「跳び箱運動」では、ねらい1・2を共通にしつつ、M（ミックス）型（ユニット合同）で行う。このように行なうことで、少人数の学年でも人数を確保し、場づくりの準備を安全かつスマーズに行なうことができるようになる。また、ICT活用をしつつ異学年児童とお互いの跳び方を見合うことで、より良いアドバイスができるようになる。

（例）T（トゥギャザー）型で、たてわり遊びを行う。高学年児童を中心に、児童で司会進行を進め、全員が仲良くなることができるようになる。

など。

- ・子どもたちを中心に据え、主体的に学習することができる授業の構築

子どもたちが主体的に学習することができるような課題の設定（パフォーマンス的課題・問題解決的学習など）をし、自分たちの疑問を解決していくことができるようになる。

学習形態として、学年を超えて、共同的な学びができるよう、グループ活動や発表を重視し、子どもたち同士が教え合ったり、学び合ったりしながら学習を進めることができるようになる。

自身の考えをアウトプットさせる際は、思考ツールの活用による自身の思考の整理・タイピング入力による文字への嫌悪感の軽減・学習アプリ「ロイロノート」を用いた意見の交流・動画や写真等を活用した視覚的支援など、学習履歴の系統化・視覚化等、ICTを有効活用し、子どもたちが自身の考えを、自信をもって表出できるようになる。

- ・教科担当制・複数担任制を生かした授業改善

教科担当制をとることで、教職員の得意を生かすことができるようになる。一人の教職員が担任していた時には、その教職員の得意不得意がそのまま学級の児童たちに直結していたが、複数の教員で

教科を担当することで、教職員それぞれの強みを生かした学習・学級経営を進めることができる。教員にとっても、教科ごとに教員が変わることで、「1時間の授業」に対する意識が向上し、授業がより洗練される効果も期待される。

また、子どもたちにとっても、教科ごとに教員が変わることで、新鮮な気持ちで学習に取り組むことができる。複数の担当がかかわることで、子どもたちが悩み事等を抱えた際には、さまざまな先生に相談することができるようになり、子どもたちが心身ともに安定して学習に取り組むことができるようになるであろう。

・体験型授業の模索

子どもたちが学習内容を身近に感じることができるように、具体物を操作したり、ICT 等視覚的教材を活用したりするだけでなく、企業や行政等学校外部の力を活用し、出前授業や社会見学に積極的に取り組み、実体験を伴った学びができるようにする。そうすることで、子どもたちは「自分事」としてとらえ、より主体的に学習に取り組むことができるようになると考える。また、日々の生活ではなかなか出会えないようなことを、出前授業等を通して経験することが、自身の世界を広げ、将来的な人格形成に役立つと考える。

<学習環境>

・メディアセンターの開設。図書室からメディアセンターへ。

図書室から、ICT も含めたメディアセンターへリニューアルする。

メディアセンターを第1ルーム・第2ルーム・第3ルーム・ライブラリスポットの4つに分ける。

第1ルームでは、従来の図書室の役割を主に果たす。本の貸し出しや、週1時間の図書の時間での活用等、司書教諭と連携しながら、子どもたちが図書に親しむことができる環境を作る。また、授業でも活用できるように整備し、低学年を中心に、普段の国語の授業を図書室で行うことができるようになる。そうすることで、子どもたちが図書室をより身近に感じ、いつでも本を手に取ることができるような環境を作る。

第2ルームには、国語辞典や百科事典・図鑑等を配架し、調べ学習に特化したルームとする。生活科や理科・社会などの学習で調べ学習をする際は、このルームにて必要な資料を探すことができるようになる。

第3ルームは、ICT 機器を配置するとともに、共同学習の場とする。このルームには、大型机を配置し、児童が小グループで相談しながら第2ルームより模造紙に学習内容をまとめるなど、グループ学習に活用しやすくする。

また、プロジェクタ及びスクリーンを配置し、ミニシアター的な環境で動画を視聴することができる環境を整える。また、360° カメラを活用した映像を鑑賞することができる環境を作る。360° カメラの映像は、社会見学先のことを映像化するなど、見通しが持てないことに不安を持つ児童や低学年児童等に対して効果的に活用することができるを考える。

ライブラリスポットについては、マンガを中心に配架し、子どもたちが手軽に読書に親しめるスペースを設けることで、子どもたちが本に親しむきっかけづくりとする。

(2) 「豊かな心」の育成に向けて

重点目標

子どもたちを中心に据え、子どもたちが多様な価値観を認め、互いに尊重し、共に支え合い高め合うことができるような学校システム及び授業を構築し、子どもたちの資質能力を育む。

具体的な取組

<学校システム>

・ 2学年によるたてわり学級の構築

低学年ユニット（1・2年）・中学年ユニット（3・4年）・高学年ユニット（5・6年）及び育成ユニットの4つのユニットにて、異学年と一緒に学習することができる環境を作る。

2学年が一緒になり、学習や遊び等、様々な学習活動に取り組む中で、上の学年の児童には上級生としての自覚が芽生え、リーダーシップをとる必然性が生まれる。また、下の学年の児童に対する言葉遣い・話し方等を意識して接していく中で、子どもたち同士の思いやりの心や、望ましいコミュニケーションをとる能力（相互調整力）が育まれると考えられる。

下の学年の児童にとっても自身が目指すべき見本となる姿が身近にあることで、同学年同士の交流では得ることができない経験を得ることができ、次年度以降、自分が上の学年になった際の他の児童との接し方について、学ぶことができる。

・たてわり時間の充実

朝 8：30～8：55までの時間を「たてわり」の時間と設定し、たてわり学級で活動する時間とする。たてわり活動を常設することで、異学年との交流の機会を増やし、それらの活動の中で、子どもたち同士の思いやりの心やコミュニケーション能力を育むことができると考える。

また、運動会や学習発表会等についても、ユニットを中心として行う。異学年児童も含め、一緒に発表練習等に取り組むことで、子どもたちがそれぞれに得意不得意がある中で努力している姿を見ることで、お互いに対する理解が深まるとともに、お互いに支え合い、協力しながらより良いものを作り上げようとする意欲が高まると考える。

<授業>

・子どもたちを中心に据え、主体的に学習することができる授業の構築

子どもたちが主体的に学習することができるような課題の設定（パフォーマンス的課題・問題解決的学習など）をし、自分たちの疑問を解決していく授業を構築する。セパレート型・ミックス型・トゥギヤザー型・アザー型等、様々な学習形態を、教育効果を考えながら使い分け、子どもたち同士がかわりあう必然性を生み出す。学年を超えて、共同的な学びができるよう、グループ活動や発表を重視した学習ができるようにする。

子どもたち同士が教え合ったり、学び合ったりしながら学習を進めることができるようとする中で、様々な子どもたちが活躍することができるようになり、それらの活動の中で、お互いに対する理解や尊重を深めることができると考える。また、友だちに認められることで、セルフエスティームを高める効果も期待できる。

・たてわり道徳の実施

道徳の学習は、学習指導要領においても、2学年ごとに弾力的に目標等が設定されていることを踏まえ、A～D「A 主として自分自身に関すること」「B 主として人との関わりに関すること」「C 主

として集団や社会との関わりに関すること」「D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関するこ
と」の4つの内容が網羅されるように配慮しつつ、ミックス型で授業を行う。異学年児童が入ることで、子どもたちの考え方・意見に広がりが見られ、多種多様な価値観に出会い、それらを認め、尊重する素地を育てることができると考える。

・作品展の実施

2月に図画工作及び書写の作品展を実施する。作品展では、図画工作や書写の学習で取り組んだ作品の中から、自分で選んだ作品について工夫したところや努力したところを書き、体育館に作品を展示する。子どもたちは、たてわりグループでそれぞれの作品を鑑賞し、良いところ見つけをする活動を行う。それにより、他学年児童のがんばりや多様性を認め、お互いを尊重する心が育まれると考える。また、展示には、向島東ブロックの学校（向島小学校・向島東中学校）の交流作品も展示する。また、呉竹総合支援学校や京都府聾学校等、居住地交流児童の作品も展示する。自校児童以外の作品にも触れることで、自分自身の視野を広げることができると考える。

(3) 「健やかな体」の育成に向けて

重点目標

子どもたちを中心に据え、子どもたちが健康に対する意識を高め、望ましい生活習慣を身につけることができるようとする。また、安全・安心な暮らしについて考え、災害や事故・事件等から、自分自身を守り、健やかに生活できるようにするための素地を養う。

具体的な取組

- 定期的な生活チェックを行う。

長期休み明けの1週間を「ふじ丸週間」と位置づけ、睡眠時間や食、排便等、生活のリズムをチェックする週間を設ける。毎日チェックすることで、子どもたち自身が、自身の生活を振り返り、よりよい生活を目指す意識を高める。また、ユニット担当や養護教諭が添削してチェック表を返すことにより、児童の意識を高めるとともに、児童の家庭背景を把握し、保護者へのアプローチについても同時に行う方法を考える。

- 様々な角度からの生活向上を目指す。

保健体育や家庭科の学習を通して、食の役割や基本的な生活習慣の大切さ等について学習を進め、栄養教諭との連携・企業等出前授業を通しての食の指導、養護教諭の生活指導等、様々な角度から子どもたちに生活習慣の大切さを伝える場面を作る。

- 児童の心の安定を図る。

児童の心の安全基地として「保健室」を活用するだけではなく、ユニット担当を置くことで、担任だけでなく子どもや保護者が安心して関わることができる教職員を増やす。また、状況に応じて、スクールカウンセラーが、本人やその保護者と面談を行ったり、毎週月曜日に行うケース会議にかけたり、緊急を要するいじめ案件の場合はいじめ対策委員会を立ち上げて方向性を話し合うなど、学校全体で児童を見守ることができる体制を作る。

- 安全・安心な暮らしについて考える。

保健体育での学習や、日々の安全ノートを活用した安全指導や、定期的な避難訓練はもちろんのこと、警察の力を借り、交通安全教室・非行防止教室・薬物乱用防止教室等、将来的にも安全・安心に生活することができるようにするための基本的な知識を身につけることができるようとする。

情報モラルについても、授業中にICT教材を活用する中で「活用型情報モラル教育」を進めてきているが、「学習型情報モラル教育」についても、出前授業等も含め系統的に実施し、自分事として考えて学習を進めていくことができるようになることで、デジタルシティズンシップが育まれていくと考える。